芦高新聞

発行所
県立芦屋高等学校
出版部
兵庫県芦屋市宮川町6-3
TEL 0797-32-2325

記念祭特集号

さらに独創性を！

去る九月二十六日から五日間にわたって、〝記念祭〟が行われた。今年のテーマは、〝WE CAN ～無限の可能性への挑戦～〟で、〝私達は何が出来、何をすべきなのか〟という意味で考えられた。今年の記念祭は、昨年の記念祭よりはいささか盛り上がったようだ。一応成功したと言っても過言ではないだろうか。

体育祭　躍動する選手達

九月二十六日、さわやかな秋晴れのもと体育祭が行われた。

記念祭開幕式の後、ロス五輪のファンファーレで体育祭は開会された。

最初の演技は、全校生徒による芦高体操で、少し固くなっていたようだった。

体操を終え観覧席に戻り、ユニフォームを着て応援を始めた。一年生のユニフォームは割合簡単なものが多かったが、二年、三年になると、派手で擬ったものが多く、グラウンド内を華やかなものにしていた。デコレーションは漫画のキャラクターが多く目立った中で、エリマキトカゲなど、時代を反映したものも見られた。

レクリエーション種目では、各クラス、ユニフォームを着て競技していたが、少し邪魔になっていたようだった。しかし、ユーモラスな演技で、場内の雰囲気を盛り上げた。

棒倒し、騎馬戦では、男らしい、激しいぶつかり合いを見せていた。

来賓、職員演技では、普段、厳しい顔をしている先生方が、がらりと変わった楽しい演技で、みんなの笑いを誘っていた。

走種目は、フライングの連続で、スタートから一メートル下げられていた選手も見られ、競技の進行が妨げられた。熱戦が多く、応援の応援団員が前に出て、クラスをまとめ、盛大な応援を繰りひろげた。

クラス対抗リレーになると、最高潮となり、選手も声援にこたえるべく、必死の形相で走っていた。

そして閉会式、成績発表と賞品、賞状授与が行われ、体育祭の幕を閉じた。

〈総合成績〉
一位　一―C　四十九点
二位　三―B　四十八点
三位　一―I　四十七点

▼一〇〇メートル
男子　加藤哲也
女子　山崎香織

▼二〇〇メートル
男子　伊塚淳仁
女子　森　佳子

▼一〇〇〇メートル
男子　一年　一―H
二年　二―B
三年　三―F
女子　一年　一―I
二年　二―I
三年　三―A

▼一〇〇〇メートル
男子　井床　勉

▼クラス対抗リレー
男子　一年　一―H
二年　二―B
三年　三―A

部説　記念祭のパターン化について

今年は第三十六回記念祭が行われたが、日数の都合で例年よりも少し早目に九月二十六日から三十日までの五日間であった。

さて、今年の記念祭のテーマは〝WE CAN ～無限の可能性への挑戦～〟であったわけだが、記念祭全日を通してテーマを感じ取る事が出来たかどうか、総評もかねて考えて見ようと思う。

初日は開幕式と体育祭が行われた。前日雨が心配され多くのクラスはデコレーションの組立てを当日早朝にのばした。何日も前からクラスでアイディアを出し費用も集めて描き上げたデコレーションだがそれだけの価値があっただろうか。確かに華やかで体育祭は多くの色で飾ざられたが、書いてある事といえば毎年同じ様なものでマンガ・アニメ等が非常に多く独創性が感じられるものは数える程度であった。

二日目は文化部公演だったが、これはどのクラブも日頃の練習の成果を発揮できたようだ。

しかし、見ている側の生徒の態度は悪く裏方の執行部はかなり困っていた様子であった。

三日目に行われたクラス展示は、十三クラスあったが、ほとんどの展示が独創性に欠けているといっていいほど、マンネリ化している点が目立った。

四日目と五日目に行われた文化部展示は、文化部公演と同じく、各部とも日頃の成果を発揮できたようだが、記念祭前にしか活動しないような部も見うけられた。

五日目、記念祭の最後を飾る閉幕祭では、例年どおりにアトラクションやフォークダンスが行われたが、特にフォークダンスでは今年も踊らずに隅にかたまる生徒が目立っていたようだ。

総評的に述べてみると全体的に独創性に欠けていたと言ってよい。今、我々には独創性に対する深い追求が必要となっているのではないだろうか。

× × ×

フリートーク　青春！～男と女～

今年で2年目を迎える討論会〝Free Talk AUS 85〟は記念祭最終日九月三十日に、図書室に於て行われた。

第二回という事で、会を成功させるために昨年の経験が生かされた様だ。テーマは〝青春－男性・女性〟で、昨年はいくつかのテーマがあったが、意見が充実しなかったので一つとした。

伯敏光先生と中村忠生先生が参加され、司会は二年の深津君と三年の名倉さんで行われた。

会はまず〝男らしさ・女らしさとは〟という問題から始められた。男らしさについて、男性からは機敏な行動力を持つ人、個性的な人、女性からは体力がある人、考えを行動に出せる人、といった意見しか出なかった。しかし男女共、「自分の意志をしっかり持っている人」という意見が出た。留学生からも「体が丈夫で信念を持ち精神力の強い人」という意見が出た。ここで司会が、〝自分の意志を持つ人は何故男らしいか〟を問題にした。これに対し、「意志を持つという事はとても難しい事であり、それができる人は男女問わず人間的に尊敬できる。」という意見が出た。次に女らしさという事で女性からは意志を持っている人、男性からは性的魅力を感じる人といった意見が出た。留学生からは「子供の世話等、心遣いがある人や、知的で優しい心を持つ人が素晴らしい。」と出た。司会は「男らしさ、女らしさの原点は人間らしさにつながる。」とまとめ、次に〝男女間に友情は成立するか〟と問題を代えた。会場は成立と不成立が三対一に意見が分かれた。不成立側男性からは意見が違う、一緒にいても別に見られる。又、成立側女性からは今も男性の友人がたくさんいる、と意見が出た。留学生は男女間の友情は少なく、またあっても愛情に変わる、という意見だった。

「いたわり合いが先行する。」「性的なものを踏んでしまう。」「一緒に何かをしている時は成立するが、一対一では成立しにくい。」「同性間でも真の友情は成立しにくいのに、異性間ではなおさらだ。」（不成立側男性）

「男女間の友情の有無は直感でわかるし、つき合ってみてもわかる。」「一緒に何かしている時、同志的なものが生まれ、それが友情だ。」（成立側女性）という意見が交わされた。

司会が、「高校生の時点では考えにくいかもしれないが、意見を主張する事は大切だ。何かのきっかけにしてほしい。」とまとめ幕が降ろされた。

普段このような意見交換の場の少ない私達にとって討論会は記念祭にふさわしい企画である。来年は更に多くの生徒に参加してもらいたい。

ゴールに向かって走れ！

講演会　アフリカの原野で

今年の記念祭講演会には昭和三十九年以来、東アフリカ各地へ農耕民の調査、研究に従事しておられる福井勝義先生をお招きして、「思考の多様性を求めて」と題する話をして頂いた。

福井先生は夫人同伴でエチオピア西南部に住んでいるボディ族を訪ねられた。その模様をスライドを写しながら説明して下さった。

その旅は苦労の連続で、川の中央で車が転倒したり、腸チフスやマラリアにかかったが、なんとかサバンナを乗り切った。そして五～六日かかって原地にたどり着いた。たどり着くと、まず原地の人々と親しくなる為に、幼児が言葉を覚えるようにして原地の人々の言葉を覚えた。

彼らの食生活はニセバナナという木の根にできるヤマイモの一種を主食として、牧畜している牛の肉は、祭儀の時以外は食べない。又彼らは各自一頭の牛を持っているが、その牛が死んだ時、その悲しみを晴らす為に隣の部落へ行って身代わりの人を殺す。だから隣の部落との争いが絶えない。それほど牛を大切にしているのだ。

またその生活で分かったのは、彼らの世界は色彩と模様を中心に実に見事に形造られているということだ。例えば、各自の牛の名前はその牛の体の模様と色で決定されていて、彼らの色彩の中心は、牛の色の黒と白が中心になっていた。私達にとって青く見える空は彼らにとって茶色であり、大地は灰色に見えるのである。

ところで、文化が未発達と思われている彼らにテープレコーダーを見せたところ、珍しがったがすぐに使い方を覚えた。そして、彼らをアフリカの街へ連れて行ったところ、ビルやエスカレーターなどを見ても驚かず、発達した文化にすぐに溶け込んでいった。しかし彼らは、洗濯機、掃除機等を持とうとしない。彼らは自分の生活（文化）に強い誇りを持っているからだ。

というところで先生の話は終わった。

これらの話から、世界に我々とは全く違った文化を持った人々が存在し、それを見て我々が勝手にどうこう判断するのはいけない、ということがわかり、それが「思考の多様性を求めて」という題につながっていることだと感じた。

〝座談会〟

講演会の後、福井先生と会議室に於いて、座談会を行った。

先生はここで出席者に「物を考える時間を持っているか。」という質問をされた。ほとんどの人は、そんな事はあまり考えていない。テレビとか漫画を見て過ごしているということだった。先生は「テレビはそれを制作した局なりプロデューサーなりが持っている世界観が表われているいわば押しつけだから自分でその他に足を運び、自分の目で見るのが最も良い手段である。」と言われた。何故わざわざ、アフリカの奥地へ足を運ぶのか。という質問には、「人間には好奇心というのがあり自分の周りにはない何かを求めようとする好奇心にかられ、思いたった。」という事であった。

ここで座談会は終了したが、私達は全く異なる世界観、社会の人々の存在、そして独自性をも認める柔軟で多様な思考をもつべきでないだろうか。

裏表独語

我が芦高の校風の一つである「自由」は、服装の面に関しても例外ではない。御存知の通り私服である。男子と女子とを比べてみると、男子の方がはるかに多く学生服を着ている。女子の方は上が私服でスカートが学生服というパターンが多い。どうしてこのような服装が固定してしまったのであろうか。私達は先輩方の服装を見て、それに習っているし、その先輩方も前の先輩方の服装に習っている訳だから、その源はどこにあるのだろう。私達が卒業した後、服装がどう変わっていくか楽しみである。私個人としては制服、それもセーラー服になってもらいたい。これも私個人の考えであるが、制服は高校時代までしか着れない服であるから、着れる時代に着てほしい。と考えている私は!?というと年中私服（スカートは制服）で登校している。だからこそ、このように考えてしまうのかなあ。

先日行われた記念祭を華げてもわかるように、何か行事があると男女問わず、私服が多くなる。普段、服装について注意している先生も、この日ばかりは目をつぶってくれているようだ。なんといっても三年間の高校生活の締めを取る卒業式では、私服のオン・パレードだ。去年初めて卒業式に出席させてもらったが、と、多くの先輩方はスーツを着た人が多く男らしく見え、女の先輩方は色っぽく女らしく見えた。今年はどうなるだろうか。私の卒業式の時は、制服で出たいけどやっぱり、私服になるのかなあ。

（三世風靡　シビア）

× × × × ×

熱演！文化部公演

去る九月二十七日、芦屋ルナホールに於て、文化部公演が行われた。午前と午後の二部公演で、各部共、三十分程度の短い時間だったが、今までの活動の集大成として、日頃の練習の成果を充分発揮出来た様であった。今年は応援団が初めての公演を行い、従来とは一味違ったものとなった。

コーラス部

コーラス部の公演は、男子生徒による「記念祭歌」で幕開けした。

一・二年だけの合唱組曲「海鳥の詩」と、ポップス「素直になれなくて」は、音量的には不足気味という感じを与えたものの、素晴らしいハーモニーだった。

NHKコンクール県大会で優良賞を得た、「君は夕焼けを見たか」、「やさしい魚」は、三年生も加わりスケールの大きな合唱を見せていた。

応援団

今年は、応援団初めての〝団舞〟が行なわれた。

先ず、「校歌」から始まった。その次は、三年生による「三・三・七拍子」・「一・一・三・七拍子」があり、観客全員がその迫力に圧倒されていた。次いで、二年生リーダーによる「芦高連舞」があり、息の合った技を見せていた。これらの合間には、副団長によるユニークな司会があり、観客を楽しませていた。最後に「応援歌」があり、最後をビシッと締めていた。

二十分という短い時間の中ではあったが、内容の濃い素晴らしい演技の数々には、心に残るものがあった。

演劇部

文化部公演午前の部は、演劇部による「碧い彗星の一夜」で締めくくられた。

大道具の設営のため、休憩を十五分程おいて、幕開けとなった。大道具といっても単純に高低を表しただけのものだったが、約一時間それを使ってあらゆる場面を上手に表現していた。

「私達は、かつて、目が覚めていたし、やがて、再び目を覚ますであろう」この言葉に穏された意味を探るストーリーに観客は魅き込まれていった。

コミカルにかつ感動的に仕上げられたこの公演は、大きな拍手と共にゆっくりと幕を閉じた。

ギター研究部

ギター研究部のステージは、ロックとヘビーメタルという二つのジャンルに分かれて行われ、これらのバンドはこの公演の為に構成されたものだった。

ロックは、「ジャンプ」「フットルース」、ヘビーメタルの方では、「シンスユウビーンゴーン」、「オールナイトロング」などが演奏され、新しく構成されたバンドとは思われぬ様な迫力がみなぎり、すさまじい音と共に、会場は熱気に包まれていった。

観客席の方では、拍手の波が絶えず、これが熱気あふれる、のりにのったステージをより一層飾っていた。

新バンドという事を克服し、演奏は好評であった。

邦楽部

文化部公演のトップをきって邦楽部の演奏が始まった。お琴といえば少し暗いイメージがあるが、「哀しくてジェラシー」・「禁じられた遊び」などみんなが知っている曲も演奏され、お琴のイメージを変えたようだった。「回転木馬」は阪神大会で大好評だっただけあって、四曲の中では一番まとまっていた。記念祭前には早朝練習を行い、この記念祭にかける意気込みが感じられた。急な人数変更があったようだが、それでもみんなの心をひとつにして演奏された曲は、観客席からは、震えているのが見られた。しかし声だけは始めからしっかりしていた。直前まで川原で練習した甲斐があった様だ。

× × × ×

吹奏楽部

文化部公演の最後は、吹奏楽部の演奏で締めくくられた。

全員制服姿で、軽快なリズムにのったマーチを始め、サックスの独奏を含んだ、「追憶のテーマ」などが演奏された。

一息ついて「メインテーマ」、「STAR SHIP」など、ポップス調の曲を取り入れている所に工夫が見られた。

全ての曲が終了した後、二度のアンコールにより、「子象の行進」や、手拍子に合わせて、話題曲の「FOOT LOOSE」の演奏で幕を閉じた。

E・S・S部

ESS部による英語劇は、O・ヘンリー原作の「THE LAST LEAFE」であった。有名な小説でありり日本語のナレーションであったので内容は把握出来たが、セリフが一部聞きとりにくい所があった。やはり大きな声で発音し、観客が引き込まれていく様なものが欲しかった。

放送部

放送部では、放送劇「白雪姫」を一年生七人がマイクと効果音だけを使って声による劇を繰り広げた。観客席からは、震えているのが見られた。しかし声だけは始めからしっかりしていた。直前まで川原で練習した甲斐があった様だ。

文化部展示

今一つの活気

今年の文化部展示は、記念祭講演会後、午後1時より行われた。1日目の人の入りは悪かったようだが、2日目になると一般公開もあったせいか、たくさんの人でにぎわっていた。

生物研究部では、生徒が研究した結果について詳しく模造紙に書かれてあり、それを生徒が詳しく説明していた。その他に建先生の公開解剖があり、好評だった。

アマチュア無線部では、QSLカードの展示や、周波数や電波についての説明や、パソコンの一般開放やそれを使った相性診断などがあり、ほとんどの人がパソコンに熱中していた。

映画研究部では、〝WAVE〟と〝不真面目探偵団―学校編―〟の合わせて30分ほどの作品を上映、少々雑だが〝不真面目！〟は楽しい作品であり、〝WAVE〟は単純だがシリアスな内容だった。

写真部では、写真による部員紹介や接写クイズ、「公園」というテーマに沿った写真、他にも芦屋の180度パノラマ写真、ポスタープレゼントなど工夫したものが多かった。客は少なかったが、「夏・自然・部活」を上映されていた。

将棋部では、懸賞つき詰め将棋や将棋のマナーとその心得や練習法、部の特色、など書いたものがあり、とても良かった。他にも指導対局というものがあり、直接、部員が指導しながら将棋をしていた。全体的に内容が充実していた。

華道部では、生けられた花がなかなか見事なものであった。リボンフラワーのプレゼントがあり、今年初めて部員が花を生けて見せたりしていて、苦労のあとが見られた。

茶道部では、茶道室にて和やかな雰囲気の中、優雅なお茶会が行われた。茶道を全く知らない人でも気軽に茶道を楽しめた。

放送部では、恒例のステレオコンサートや、フィルムコンサートが行われた。会場は人で熱気ムンムンであった。

美術部では「陽光と陰影」をテーマに各自四点ほどの作品展示をしていた。一年生の共同作品の切り絵〝三国志〟があり、とても素晴らしかった。また一般公開の日には手書きのしおりを配布していてなかなか好評だった。

史学研究部では、淡路島の歴史・風俗を壁新聞に書いて展示してあった。又農具とかも展示してあった。

鉄道研究部では、例年通り、鉄道模型や写真展示が行われた。鉄道模型はとても細かくできていて良かった。

落語研究部では、まず一年生の落語から始まり、客の入りも上々で結構うけていた。二・三年生になると客が減ったが、内容は一年生よりうまく、キャリアの差を感じた。

ギター研究部は、相変わらずの人気で中に入ると熱気ムンムンであった。フォークやヘビーメタル、ポップスやパンクなど様々な分野にわたって、盛り上がった演奏をしていた。

執行委員会主催のバザーが行われた。珍品ぞろいで、売る人は必死に客よせしていた。

毎年のことだが、部によって人気の差が激しかった。これは文化部全体の大きな課題であろう。

クラス展示

祭り本番！

記念祭三日目の二十八日には、クラス展示が行われた。

今年の出展数は一年―四、二年―五、三年―八、執行部が夏休みに参加を呼びかけた甲斐あって、近年になく盛況で、しかも内容も充実していた様だ。

今年の展示の傾向としては、やはり飲食関係とTVの人気番組を模したものが大きな比重を占めていた。

南館被服室では、恒例の「のどじまん」が一―C、三―Fの二学年合同で行われた。暗幕を張った室内は、人いきれでムッとする程の熱気で、ものの二、三十秒で汗がふき出してきた。この日はどこでも、人が集まる所はこんな状態だった。

また、一―A「迷路」、3―B「お化け屋敷」に人気が集まり、整理券をもらい入場する為に20分近く待たされた。「迷路」はタイムトライアルとクイズを巧みに組み合わせた迷路で、最短時間で通り抜けた優勝者には千円相当の賞品が贈られた。「お化け屋敷」は定石通りのぬれ雑布、コンニャク、人形の生首、（マスクのお化け達）と女子生徒には「もの凄くこわかった」と好評だった。

二―A「フィーリングカップル」、三―A「ラブアタック」、二―C「パンチDEデート」には、サッカー、ラグビー、バスケット、その他の運動部員が出場した。最初はぎこちなかったが、何組かのカップルが誕生した。

三―E「ライブ・ショウ」は三年生のロックバンドの活気溢れる行動力と、それを支えるクラスとが、三年生でなければ出来ない力強い展示が出来上がっていたようで、ここも熱気で一杯だった。

他には三―D「なるほどTHE HOW MUCH」は、予想に反して、客の入りがいま一つだった。

執行部も同様の展示「何人かに聞きました」をしていた。アンケート結果の数字を中心に出題し、単調になりがちな所を豪華景品（鉛筆とチリ紙）で引き締め、楽しい雰囲気を作ってしまった。三―C「かくし芸大会」は、客入りは上々で、出演者は日頃磨いた腕（？）を披露していた。模擬店は二―Eが「ゴースト喫茶」、一―Eが「ゲーム&喫茶」を開いていた。一風変わった所で三―Aの「おでん」があった。他にも一―F、二―Aの「縁日」で、ラムネや手造りお菓子、金魚すくい、くじ引き、的あてなどしていて売れ行きは上々だった。

閉幕祭

全てが終わり…

今年で三十六回目を迎えた記念祭も、この閉幕祭で幕を閉じる事となった。

まず初めは記念祭歌斉唱で、続いて学校長、自治会長の挨拶が行われた。

次に体育祭で、バックを飾ったデコレーションや、芸術展示の優秀作品の結果発表があり、表彰された。

その後、体形が中央に移動して、アトラクションが始められた。最初に吹奏楽部による、「スリラー」、「哀しくてジェラシー」、「十戒」などのヒット曲で雰囲気を盛り上げ、最後に「スパニッシュフィーバー」が演奏された。

この後、楽器の準備をしている間に、飛び入りがあり、ものまねなどをして笑いを呼んだ。

それからのどじまん大会の優勝者と、準優勝者による、「ビーロー」、「前略、道の上より」が歌われた。「ビーロー」では迫力のある歌いぶりが見られ、「前略、道の上より」は、演奏中にバク転などの、激しい動きがあり、観客の目を引きつけた。

続いて、九月十五日に開かれたオーディションの、二組の準優勝バンド、〝DONAIYA'S CLUB〟の「LISTEN TO THE MUSIC」と、〝RIKEI BAND〟の「ロックンロールトゥナイト」他二曲が演奏された。そして優勝バンド、〝ROUND LIPS〟の「スウェア・ユア・ラブ」他、一曲だった。みんな手拍子だけで、あまりのりが良くなかった。

アトラクションが終わるとファイヤーストームが点火され、すぐフォークダンスに移った。曲は、去年に引き続き「ダンシング・クイーン」と、今年は新しくラッツ&スターの「Tシャツに口紅」だった。初めはみんなとまどっていたが、しだいに輪が広がりいいムードだった。しかし輪に入らない人も多く、もっと多く参加してほしいものだ。

フォークダンスが終わり、すっかり日が暮れた後、応援団リーダー部による校歌斉唱並びに校旗記念祭旗降納が行われた。その後すぐ閉幕宣言のはずだったが、生徒の強いアンコールにより、自治会歌が斉唱された。

その後、記念祭当初から正門の上に飾られていたネオンが輝き最後を飾った。

編集後記

さて、今度の新聞はいかがでしょうか。

今回の新聞は、部説・裏・独・フリートークを除く全部の記事を一年生に担当してもらった訳ですが、やはり初めてのことなのか、取材や記事の面でかなり悪戦苦闘していたようです。とはいうものの、去年の新聞（僕達二年生がつくった新聞ですが）よりも大幅に発行日も（質も？）アップして、とにかく今年の一年は意気込みがすごく、全員（？）はりきっています。その点はかなり期待できると思っていますので、来年もよろしくお願いします。

ところで、僕達二年生の仕事も芦笛の編集のみとなりました。この一年間、満足に仕事をしていた感じがしないのですが、僕等なりに一生懸命やってきたつもりなので、僕等の最後の仕事の芦笛もよろしくお願いします。

最後に、この新聞に御協力して頂いた皆さんに感謝します。どうもありがとうございました。

＝記念祭の反省・感想＝

一年生に聞いてみたところ、疲れた、取材をもっとしっかりすればよかった、難しかった、もっと取材を詳しく計画出来なくてみんなに迷惑かけた、記事にする段階が難しかった。等、やはり、全体的に難しかったようです。一年生にはこの反省を通して、来年につなげてがんばってほしいと思います。

＝お詫びと訂正＝

前号の新聞の「記念祭・昔と今」の記事の中で高木先生のお名前を「博史」としていましたが、「正皓」の誤りでしたのでこの紙面を借りて慎んでお詫びと訂正を致します。